

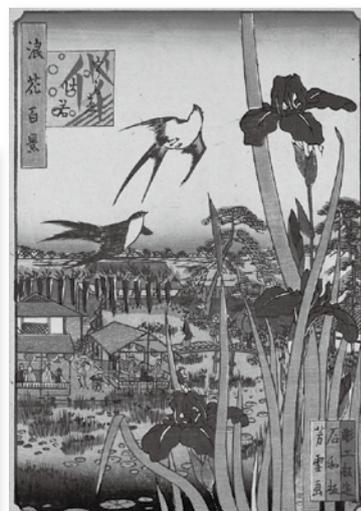
おおさか  
KEY  
ワード  
第47回



◎玉川春日神社境内の藤

◎野田の藤跡の碑(玉川春日神社)

◎「浪花百景」より「野田藤」  
(大阪府立中之島図書館蔵)



◎「浪花百景」より「うらえ杜若」  
(大阪府立中之島図書館蔵)

ひとつきおくれの花だより

絵のなかの藤、杜若、牡丹を巡りましょう

月日は百代の過客にして、あつという間に春の“梅”や“サクラ”がおわり、いまは、四月五月の季節の花が咲き誇り、心地よい新緑の風が吹いている…と書き出してはみたが、すでに六月になり発行日の関係で一月おくれの花だよりとなった。

緑の少ない街に思われている大阪だが、江戸時代から花の名所があった。歌川派の浮世絵師である一養斎芳瀧、南粹亭芳雪、一珠斎国員が競作した幕末の有名な錦絵「浪花百景」に初夏の花を探ってみよう。

まずは「野田藤」。福島区玉川の春日神社は、かつては「藤の宮」とも呼ばれる藤の名所で、室町将軍・足利義詮や豊臣秀吉も観藤会を催し、最古の大阪案内記『蘆分船』(1675年)にも「よし野のさくらに、野田の藤、高尾の紅葉」と記される。明治に日本の植物分類学の先駆者の牧野富太郎は、日本固有の藤の標準和名を「ノダフジ」と定めた。「浪花百景」では、芳瀧が担当して咲き誇る藤の花を描き、逍遙する客がそれを愛でている。

社にあった藤の老木は第二次大戦の空襲で焼失したが、ライオンズクラブをはじめ地元の努力で復興され、現在は福島区内の学校や公園など各所で藤が育てられ、区民の花に定着した。

次が同じ福島区鷺洲にある了徳院の「うらえ杜若」である。浦江聖天と通称される了徳院は、境内の池に咲き誇る杜若で知られ、芳雪が描いた「浪花百景」も杜若に飛来したツバメを描いてみずみずしい。周囲は遠くまで開けたのどかな田畑地帯で、茶店には風流な

客が座している。同寺に、文化11年(1814)建碑の芭蕉句碑「杜若語るも旅のひとつ哉」があるが、俳聖・松尾芭蕉もこの地の初夏の気分を堪能したのだろう。

最後に「吉助牡丹盛り」である。江戸時代から高津宮(中央区)付近には植木屋が多く、「就中高津の吉助を以て魁とす」(『撰津名所図会大成』)として、吉助こと松井吉助をその先駆にあげている。吉助は、牡丹と秋の菊花を一般公開したので見物客で賑わった。「浪花百景」の絵師は芳雪。その手腕が楽しめるのが、遠近法を利用して、“マンモスフラワー”のような巨大な花に見える牡丹の下に、遠くの人物を配置し、「わあお、なんて大きな牡丹やおまへんか!」と歓声をあげているように見せるトリッキーな構図だろう。花を描く絵師にもそれぞれの創意工夫があった。

ところで「浪花百景」と「花」について気になることがある。「浪花百景」は全100図あるが、100枚それぞれに記されたタイトルに「浪花百景」と「浪華百景」の二種がある。「うらえ杜若」「吉助牡丹盛り」は「浪花」、「野田藤」は「浪華」である。

漢字の「花」は、くさかんむりに化けると書くことから、草が化けて花になったとする説がある。ならば「浪花」は海であったところが陸地に化けて栄えた土地といえるかもしれない。「華」は字の形から木に咲く花とか、丸い形の花を指すとか言われるが、「豪華」「華麗」「華やぐ」など形容詞的に用いられ、イメージを誘発させる文字である。私は「浪花」の字面に、まったりした印象をいただき、「浪華」に派手な都会的殷賑を感じるのだが、みなさんはいかがでしょう?